

設楽発掘通信

No.60
令和3年
1月号

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡特集！

今年度の設楽ダム関連の発掘調査のうち、川向地区の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査は、一万㎡近くの面積にわたる、大々的な調査となりました。その調査も、一月で終了となりまして、目覚ましい多くの成果を得ることができました。

その中でも、弥生時代中期後葉（今から約二千年前）の集落跡の調査で、周堤の残る良好な状態のたてあな竪穴建物跡が発見され、大きな話題となったのは、記憶に新しいところです。

愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査では、事業者などの打ち合わせのもと、調査年度や土地の区画によって、調査区が設定されていきます。上ヲロウ・下ヲロウ遺跡では、昨年度調査された十九区に加え、今年度は県道と沢を挟んで、二十A区・二十B区・二十C区の調査区が設定されました（図1）。特に、二十A区と二十C区で、注目すべきまとまった調査成果を得ることができたことから、本号では、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の特集を組むことにいたしました。

発掘調査の実施には、地元の皆様のご理解・ご協力が何よりの力となります。そのお陰様に感謝申し上げます。意味でも、調査成果をお届けできればと存じます。

（川添和暁）
かわぞえかずあき

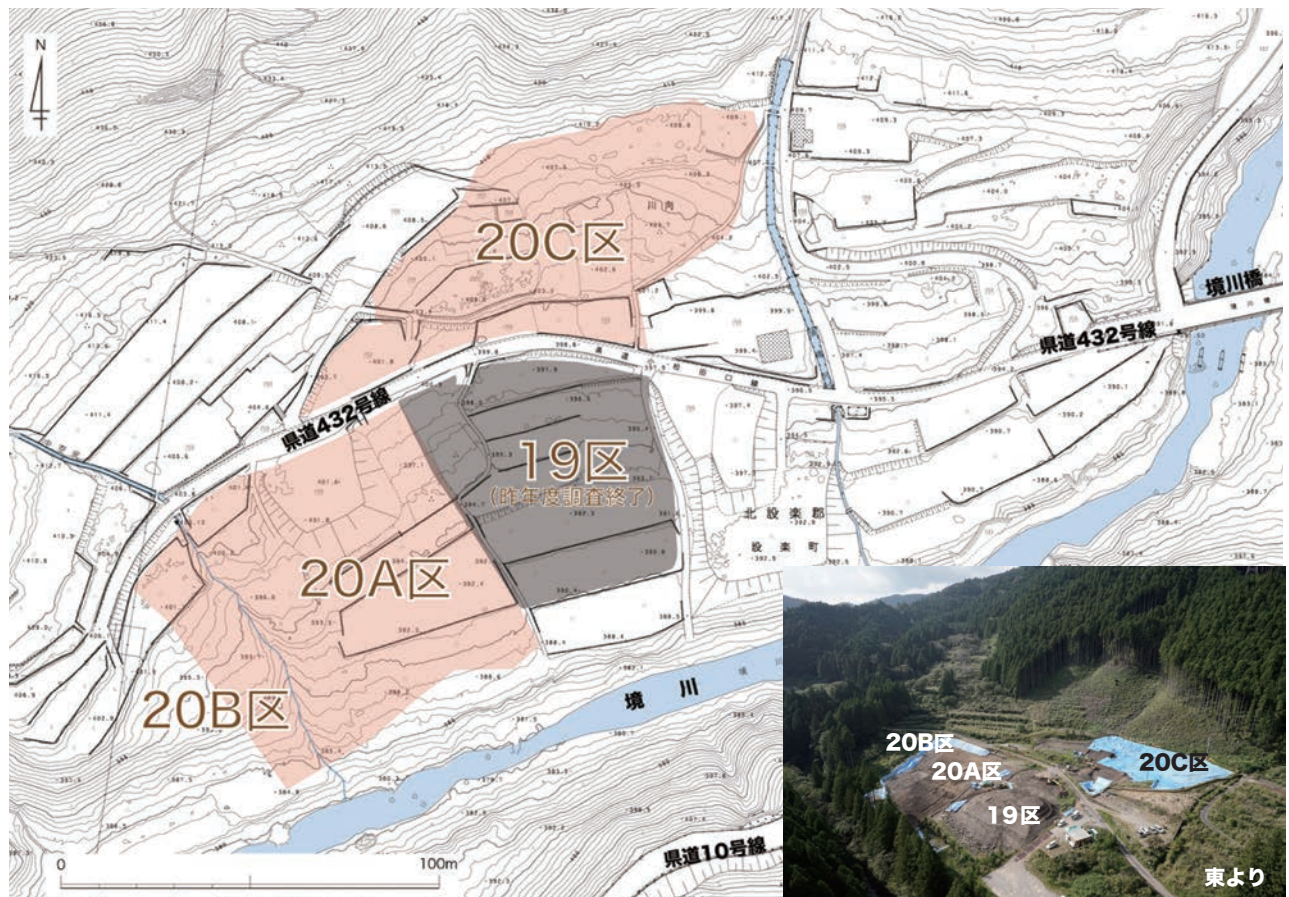
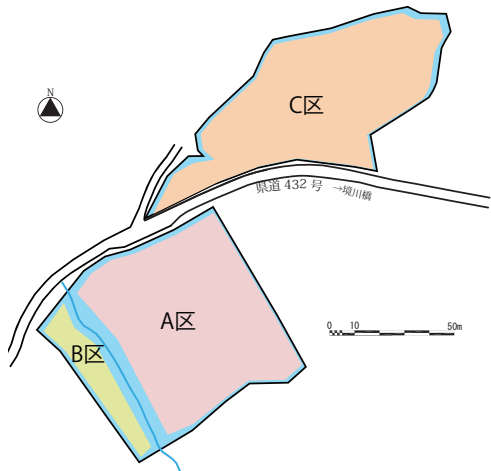


図1 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 全体図

かみしも 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 特集



A区

今号は上ヲロウ・下ヲロウ遺跡特集号ということで、この頁ではA区の調査成果をご紹介します。

A区では、弥生時代中期後葉の集落跡が検出され、さらにその下層から縄文時代後期の配石遺構群や縄文時代中期後半（約二千年前）の石囲炉を伴う竪穴建物跡などが検出されました。上段では弥生時代中期後葉の集落跡について、下段ではそれ以前の集落跡についてご紹介します。

弥生時代の竪穴建物跡は、設楽町内では初めての事例となりました。しかも一部の竪穴建物跡には周堤（土を盛り上げて堤にしたもの）が良好に残っており、全国的にも珍しいことは、前号まででお伝えした通りです。その後、さらに調査を進めた結果、周堤内では焼土を含んだ土坑や甕の据えられた土坑が検出されました。これらの遺構は、周堤の土を積み上げる途中で構築したようで、儀礼的な行為だったのではないかと考えています。



写真1 周堤の残る弥生時代中期の竪穴建物跡 南から



写真2 周堤内から出土した甕 北東から



写真3 縄文時代の遺構の展開 東から



弥生時代中期後葉の集落跡の下層からは、縄文時代後期の配石遺構群や大型土坑群、土器埋設遺構などが検出されました。また、現在の境川に近い場所では縄文時代中期後半の石囲炉を伴う竪穴建物跡などが検出されました。

縄文時代後期の配石遺構群と大型土坑群（写真3の赤枠）は、焼土がないことや人為的に石を並べていること、土器を埋設した土坑も検出されていることから、この場所一帯が祭祀や儀礼的な場であったと考えられます。

一方、縄文時代中期後半にやや時代が遡ると、石囲炉を伴う竪穴建物跡などの居住域が川の近くに展開します（写真3の黄枠）。その中でも特徴的なのは、南西にある竪穴建物跡（矢印）です。この竪穴建物跡は、礫層を掘り込んで構築されていました。この竪穴建物跡から検出された石囲炉は、炉内の底面に大きな土器片が敷き詰められていました（写真4）。一見すると土器が埋設されているように見えますが、口縁部付近しかなく、底部や胴部がないため、大きな破片をわざと敷き詰めたものと考えられます。また、これらの土器片を外すと、若干焼土の混ざった土がありました。このことから、土器は炉の使用時に入れられたのではなく、使用しなくなった段階で敷き詰めたことがわかりました。（田中 良）

C区

C区では、十二月に空撮を行いました。西端部の地面が平坦な区画では、複数の掘立柱建物や杭列の跡とみられる柱穴が見つかりました。西端部での出土遺物は近世のものほとんどで、建物跡などもその時期と思われる。

またC区東部の南側に向かって広がる斜面地では、古代以降の包含層、弥生時代から縄文時代晩期の包含層、さらには縄文時代後期の包含層の堆積が、上から順番に確認されました。縄文時代晩期の包含層では、土器片などの遺物が認められる程度でしたが、石棒石刀類も一点出土しました（写真5）。これは、縄文時代晩期前半に属すると考えられる資料で、当地付近で祭祀行為が行われた時の道具と思われる。その下層の縄

文時代後期の包含層を掘削していくと、土器片のほか、石匙や打製石斧、定角式磨製石斧などの石器も多数出土するようになりまし。写真7はこの縄文時代後期の包含層を掘り下げた状態で、落ち込んでいる場所に、遺物が出土する様子を確認することができました。この段階になると、縄文時代後期の土器のほか、縄文時代中期の土器がまぎって出土する場所も見つかりました。このように、発掘調査では、遺物の出土の様子を詳細に観察しながら、当時のヒトたちが活動していた痕跡が見つかると、遺構の面を探っていきます。そうすると、遺構のまわりや集落跡などを見つげることができるようになります。（河嶋優輝・川添和暁）

B区

B区では、前号でお知らせした遺構は、掘削の結果、全て前号でお知らせした遺構の掘削を行った後、行った後、遺構北側の緩斜面と、その北の石垣で囲まれた箇所の下層確認を行いました。前号でお知らせした遺構は、掘削の結果、全て土坑であり、一箇所より縄文時代の石器が出土しました。その後、北側緩斜面の下層確認調査では、最下層で円礫混じりの砂層を確認しました。この層は、礫の形状が円礫であることから、河川堆積物と考えられます。その結果、B区内で河川が東西に流れていたのではないかと推測されます。B区北端の石垣で囲まれた箇所の下層確認では、西側の土層断面を確認したところ、傾斜の強い、礫の混じらない黄褐色の山砂層が確認されました。この黄褐色の山砂層が本来の地山で、それより上に巨礫の混じる土石流堆積物、そのさらに上層に近代以降の盛土がありました（写真8）。



写真8 B区北端の確認状況 東から

B区での調査はこれで全て終了いたしました。土坑五基と数点の石器が確認できたほか、古い河道跡などが発見されました。ここにも縄文時代の人々の活動の痕跡を確認することができました。（渡邊 峻）



写真6 蛇紋岩製定角式磨製石斧



写真5 石棒石刀類出土状況



写真7 包含層中の遺物の出土出土状況（竹串の立っている場所が遺物の出土した場所です）

ヲロウの古道と境川の渡河点

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡は江戸時代から明治時代の川向村に含まれ、「延坂」(『設楽発掘通信』第四三号で紹介)に通じる「ヲロウ道」が、遺跡の北東方向から南西方向へ通っています。その終点近くは、明治時代に作成された地籍図によると「下ノサワ道」と呼ばれ、境川右岸へと下っています。

一方、その対岸にある小松村の地籍図には、笹平遺跡の場所に、境川の左岸へ下っていく一本の道が記されています。これらの道を図上で合成すると、境川とある一点が目標になっていたことがわかります(図2)。つまり、ここで境川を渡河していたと考えられます。ただし橋の表記はありません。地籍図に橋の表記がある境川の渡河点といえば、滝瀬遺跡の地点があります。



図2 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡における近代以降の道路と石造物の分布

これは伊那街道で、現在も鉄道の古レールを転用した橋がかかっています『設楽発掘通信』第二六号で紹介)。さて、下ヲロウと笹平間の渡河点は、現地をみると川幅が狭くなり、ここだけ兩岸の崖が緩やかになっていきます。また、川の中には大きな岩がいくつもみられます。かつてはこれらを飛び石にして渡ることがあったのかもしれない。(写真9)。

ところで、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡とその周辺では、十基以上の石造物(石塔・石仏)があったとされています。最も古い年号は寛永年間のもですが、一八世紀後半〜一九世紀前半のものが主体となっています。

石造物が確認された地点を地籍図に重ねてみると、興味深いことに、古道の要所に位置しています。また、元文元年の川向村絵図に「宮」と表記されている地点近くでは、石祠が確認されています。今後は、古道や石造物と遺跡の発掘調査でわかった遺構や遺物との関係を検討していくこととなります。(永井邦仁)



写真9 下ヲロウと笹平の間にある境川の渡河点推定地 (2016年)

設楽発掘通信

No.60 令和3年1月号

編集・発行

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24

電話 (0567) 67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力

国際文化財株式会社

